

経理研究所：3本の柱

中央大学経理研究所所長 商学部教授

木島 淑 孝



私の専門領域は原価計算・管理会計です。A.C. リトルトンは、名著『会計発達史』で、原価計算を「産業革命の申し子」と表現しました。これは原価計算が工場を母体として生まれ、そこで醸成されてきたことを意味します。ですから、原価計算(管理会計)の研究には、工場を知ることが何よりも大事となります。そういう訳で、私もこの30年余、内外のいろいろな工場を訪問してきました。そうした工場調査あるいは幹部との論議の場で、「実は、私の会計や原価管理の知識は、中央大学の経理研究所でございまして…」という話をよく聞かされたものでした。その方々は中央大学卒ばかりではありませんでした。むしろ印象としては他大学卒の人が多くいました。かつての経理研究所はそうした役割も果たしてきたわけです。私の耳にはそうした言葉が強く残ってありました。

昨秋、経理研究所所長の話聞いたとき、まずは太田哲三、井上達雄、飯野利夫、富岡幸雄、佐藤進といった学会を代表する先生方が就任されてきた所長を、私ごとときがお引き受けすることに少なからず躊躇いを感じました。しかし同時に、実務で活躍されている方々の前述の声、私の胸に去来しました。それが私の決意の決定的要素となりました。

公認会計士として現在活躍されている皆様は、

経理研究所というと二次試験受験を通じての想いが大きいかと思います。その業績がいかに大きなものであったかはご存知の通りです。けれども私は、経理研究所の役割はそれに尽きるものではないと思っております。私は経理研究所の柱を3つと考えております。研究活動、社会人講座、受験支援です。

経理研究所というのは、その名が示すように「研究所」です。それも、日本比較法研究所と並ぶ法人付置の古い歴史をもった研究機関です。そうであれば、過去の経緯がどうであれ、経理研究所に研究活動があつて然るべきものと考えます。それも、会計に特化した研究テーマの下で、研究者に限定されることなく、広く公認会計士、税理士、経営コンサルタント、企業人などによる実践的共同研究活動でありたいと考えております。もちろん、その実現には諸々の問題を克服していかねばならないことは承知しております。その第一歩として、今年は経理研究所編纂・発行の会計研究雑誌「経理研究」の刷新を図りました。特集を組み、実務家の原稿を募りました。結果、その趣旨の理解を賜うことができ、実務家からも多くの論文執筆の承諾を頂戴することができました。それを手始めとして、本格的な研究活動実現を目指していくつもりです。

経理研究所は、中央大学が社会に開いた窓口と

しての役割も担っていると考えております。具体的には、この役割を、社会人講座として展開しております。この講座は、市井のそれらとは異なり、中央大学の識見を示さねばなりません。損得を度外視した高いレベルの講義を用意しなければなりません。そのため当代一流の人材に講師をお願いしております。現在、「A&B フォーラム」、「財務会計講座」、「税務会計講座」、「管理会計講座」を開講しております。「A&B フォーラム」の「A&B」は「ビジネス&アカウンティング」です。したがって、このテーマは、上場企業の社長・重役経験者、社会学者、経営学者などの講義を含めた広い観点から設定しており、聴講生参加のゼミ形式で実施し、好評を得ております。「財務会計講座」は、「2005年問題」をテーマとして開講しております。この講座は、本会の方々のご尽力によりまして、今年度から公認会計士協会のCPE単位取得講座に認定されました。また、「管理会計講座」は今年初めて開講いたしました。前期は「業績評価」、後期は「コスト・マネジメント」をテーマとし、経営コンサルタントを講師として、斬新な内容を提供しております。この講座は、有り難いことに当初の予想を遥かに超える受講者を得ることができました。企業がいかに管理会計技法に苦悩しているかの証左であろうと思っております。

中央大学の現役生および卒業生にとっての重要な課題は受験支援です。この支援活動は簿記教室と二次試験受験講座です。これらは歴代の所長が営々として築かれた基本型を踏まえつつ、状況変化に対応しながら展開しております。今年度の簿

記教室などは、700名を超える受講者があり、教室確保に懸命という状況です。これには、二次試験受験のみならず、優れた企業会計人を養成することも含まれます。学生時代にその能力を高めておく事は、卒業後企業において、個人の評価は元より、中央大学の質と名声を高めることに直結するものと信じるからです。加えて、今回の公認会計士試験制度改革への対応に、スタッフ一同労力を費やしております。しかし、合格者の数を問題とするだけでは、これまで日本あるいは世界の会計実務界の中枢を担ってきた中央大学卒業生の期待に添うことは出来ないと思います。合格者数とともに、そうした伝統を絶やす事のない人材を創出していくことも経理研究所の責務と考え、全力を尽くす覚悟でおります。

お前の言うのは理想に過ぎない、お前の役割は二次試験の合格者数を増やせばそれでいいのだ、余計なことは考えるな、という声が聞こえてきそうです。でも、経理研究所も大学の部分です。大学が理想を追わずに、何処で理想を追うのでしょうか。そういう気持ちが私の経理研究所活動のベースにございます。ご理解を戴きましたら有り難く思います。

しかし、これら経理研究所の三本柱をより充実していくには、われわれ関係者の能力では限界があることは明かです。これをお読みになられる皆様方の深いご理解に加えて、忌憚のないご意見が必要不可欠と考えております。今後とも、経理研究所ひいては中央大学発展のために、ご支援を願うものでございます。

会長に就任して

中央大学公認会計士会会長

金 井 一 夫



私の入学当時（昭和33年）の駿河台校舎の周辺は、安保反対運動の掲示やチラシが目を追うご

とに増えていた。その中庭でのサークルの勧誘につかまったのは、小学校からの友人が入っていた

白珠会であった。その友人は、今なお、今年で20回目になるが、母校八王子校舎において、全国高等学校珠算競技大会を開催し続けている。当時の中大には、珠算日本一など有名選手が全国から集まっていた。

なにせ一級の掛け算（5桁×5桁）、割り算、見取算のそれぞれを通常は10分間でやる問題を、その半分の5分でできない者は入部させないというほど、超ど級の商業高校出身者の集まりであった。ほとんどの部員が苦学生で、午後は珠算塾に駆けつけて先生に変身したり助手をしたりして奨学金のほかに学費を稼ぎながら、駿河台に通っていた。私もそのような一人の学生であった。

そして、学部2年の春、駿河台校舎の中庭で声をかけられて入会したのが、公認会計士第二次試験の合格を目指す受験団体の組織であった会計学研究会である。その会に入ってみると、珠算で顔見知りの芝商業の川島正夫さん、都立三商の浅野修一さん、荻野弘康さんらがいるのに驚いた記憶がある。同期生には、宮崎和郎、木下徳明、渡辺恵一郎君らがいて、以来、私はその先輩、友人らに囲まれて、なにやかやと迷惑をかけながら、わが人生が今日に至っている。

ゼミは、商学会の友人の誘いで、当時、産学協同を唱えていた原価計算の今井忍先生のゼミに入った。先輩には白鳥栄一さんがいた。ゼミの関係で産業経理協会の原価会計講習会に通い、所長黒澤清名の原価管理士資格証明書の黄色く変色した一枚の用紙が手許にあるのが懐かしい。今井忍先生には、今井先生独特のキャラクターがあり、確か、東京計器だったかにストップ・ウォッチをもって作業員の動作研究に行ったなど校外授業が楽しかった。今井先生は早世をなさった。白鳥さんが、当時アーサー・アンダーセンの事務所におられた関係で、後輩の二次試験合格者が、その事務所はかなり入所している。

3年生の一年間は、中大図書館に朝早くから席を確保するためによく通い詰めた。その図書館の廊下で息抜きの時に知り合った、その後CPAになった人の顔を、今懐かしく思い出す。

会計学研究会の会長は、井上達雄先生で、ご壮健で、学校でも公認会計士としても活躍なさっていた。私の30から40歳代の10年間は、二次試験に後輩が続々とチャレンジし、公認会計士合格者の数が年々増えていた時代であった。

公認会計士協会本部の監査委員会の小委員長として、「正当な理由に基づく継続性の変更」の答申書をまとめあげて一息ついていたときに、先輩の川島さんからKKコンビとして日本公認会計士協会本部の理事選挙に出ないかと誘いが当時あり、プライス・ウォーターハウス出身の川島さんとピート・マーウィック・ミッチェル出身の増田浩二さんに大変お世話になって、当選させていただいた。以来、私は、本部役員としての奉仕活動をなんと23年間も続けてしまったのですが、その間変わりなくご支援を続けてくださった中大の皆さんのご友情にこの場を借りて、厚く御礼を申し上げます。本当に長い間、ありがとうございました。

それにしても、井上達雄先生には、会計士協会の選挙毎に、ご後援をいただきお世話になった。酒席にも幾たびも陪席させていただいた。激励のお言葉をいただいたときは嬉しかった。時には、囲碁に2番立て続けて勝ってしまい、しばらく口を利いてくださらないことなどもあった。

その23年間に、私が副会長6年にお仕えした本部会長は、宮坂保清先生を初めとして、尾澤修治、中瀬宏通、川北博（2期）、村山徳五郎（2期）、山上一夫、山本秀夫、高橋善一郎の先生方8人になる。本学出身の本部会長は、皆さんご存知の川北博先生と山本一夫先生ですが、お二人の会長選挙は大変な選挙でしたが、今思うと井上達雄先生のご後援のもと、母校中央大学が一致団結して勝利した思い出の多い選挙であった。

中央大学公認会計士会の「絆」をさらに強くするためにも、そろそろ母校中大出身の日本公認会計士協会の会長が欲しいところです。現在の協会本部役員71名中に本学出身者は18名もいる。ほとんどが50歳代で、知力、経験十分な人たちとお見受けする。この役員の中から、人柄のいい実績のある人を本部会長選挙にかつぎ出してくれない

かなと私は密かに期待している。

幹事長には新任の後藤徳彌さんにご就任いただきました。副幹事長の皆さんにもご協力いただき

て、2年間の任期を微力ながら全力を尽くしたいと存じます。会員の皆さまのご協力を、心からお願い申し上げます。

第24回日本公認会計士協会研究大会

「高松大会」報告 四国会

鍋嶋 明 人



1. はじめに

去る7月23日に、標記の第24回日本公認会計士協会研究大会が高松市で開催されました。主会場は、高松では最高のロケーションを誇るオープン3年目の全日空ホテルクレメント高松で、西には鉄道併設橋としては世界最大の瀬戸大橋、北には美しい小島が漂う瀬戸内海、東には源氏・平家の古戦場として有名な屋島、南にはお堀に黒鯛の泳ぐ海城で有名な高松城（玉藻城）と美しい町並みの高松市街を臨んでいます。また、今年は梅雨明けが遅れ天候が心配されましたが、参加会員と大会関係者の熱意が天に通じたのか、大会直前に梅雨明けし関連行事を含めて、天候に恵まれた大会となりました。

研究大会は、協会本部行事ではありますが、従来より各地域会が持ち回りで開催しており、今回の開催担当地域会である四国会で一巡する節目の大会でもあり、協会本部ならびに四国会の大会関係者のご努力により、また、CPE（継続的専門研修制度）の義務化というフォロー・ウィンドもあり、登録者数718名（うち会員518名）という多数の参加者を得て、成功裏に終了いたしました。関係各位に感謝致します。

2. 研究発表

今回の研究大会では、「いま、公認会計士の進む道」—信頼をカタチに 広がるニーズ—を統一テーマに、以下の6分科会が開催され、熱のこもった発表者の意見発表や参加者との質疑応答

が繰り広げられました。

- 第1分科会 大学発ベンチャーの課題と公認会計士の役割
- 第2分科会 環境報告書における第三者検証の機能
- 第3分科会 EUの「IAS2005年問題」から考えるわが国の対応
- 第4分科会 企業再生のニューフロンティアと公認会計士の役割
- 第5分科会 地方自治体経営のための行政評価制度
- 第6分科会 公認会計士法の改正と倫理 —特に独立性の諸問題への対応について

分科会の各テーマは、いずれも時流に合ったものであり、また、昨今の公認会計士に対する社会の強い期待を反映した業容の広がりにも対応しており、発表者も会員ばかりでなく、行政、金融、大学及び公的機関の関係者と多彩な面々であり、非常に有意義な内容でした。奥山本部会長も本部署役員会等で、研究大会は今回の高松大会で地域会を一巡する節目であり、また、CPE義務化を踏まえて、研究大会を充実させる旨の発言をされており、研究大会の更なる充実が期待されるところです。

3. 記念講演会

研究発表に引き続き、ベンチャー企業の草分け的存在で、現在冷凍食品で急成長中の㈱加ト吉社

長に加藤義和氏に「がんばれば、ここまでやれる」の演題で講演していただきました。加藤氏が15歳から魚加工品の行商で身を興し、類まれなるチャレンジ精神とアイデアで成功した苦労話をユーモアを交えて話され、また、自らの10年超の観音寺市長の経験を踏まえた現代社会への痛烈な示唆に、多くの聴衆は感銘を受けたのではないのでしょうか。

4. 関連行事

研究大会の関連行事として、記念パーティ、観光5コース並びにゴルフ大会が用意されていました。記念パーティでは瀬戸内の美味しい魚介類と讃岐うどんに舌鼓を打ち、観光では南海の雄大な太平洋を一望できる足摺岬と日本最後の清流といわれる四万十川の「足摺・四万十コース」がダントツの一番人気で、参加者は南国土佐を存分に堪能されたと思います。また、ゴルフ大会では、わ

が中央大学公認会計士会のメンバーである北海道会の川崎毅一郎先生が見事優勝されました。

5. 中央大学公認会計士会懇親会

研究大会記念パーティの後、恒例の中央大学公認会計士会の懇親会が、藤沼前IFAC会長ほか会員及びご家族と一部他大学の有志の計27名が参加して開催されました。例年より若干集まりが悪いようでしたが、和気あいあいと歓談し、楽しい讃岐の夜を過ごしました。わが中央大学も「アカウタント・プログラム」等の大学、学生の努力により、昨年の二次試験合格者は90名を超え、また、国家試験強化のシンボルである多摩学生研究棟「炎の塔」の建設により、今後更に後継者の増加が期待されます。われわれも後に続く後継者のために、更に結束を固め、中央大学公認会計士会を盛り立てていくことを祈念して、研究大会「高松大会」の報告とさせていただきます。

中央大学国際会計専門大学院 客員教授就任の前後

もう一昨年前の冬のことである。本大学の評議員であり本大学院設立に尽力され、日頃から何かとお世話になっている公認会計士の増田浩二先生から、ファイナンスと国際税務の分かる実務家を探しており、あなたをお願いしたいとの申し出があった。一方、本大学院設立準備室長で中西ゼミ並びに白門会の大先輩であられる矢部教授からも、以前から講義のお手伝いをしていただけなにかとのご依頼があった。両先生からは、本大学院の教員集めで大変ご苦勞されているというお話を前々から伺っていた。客員教授就任はまだかなり先のことであり、少しずつ準備すれば何とかできると、簡単な気持ちでお引き受けしてしまった。そして自分の心の中には母校のお役に立てるのでは

公認会計士

川村 芳 則



ないかという気持ちもあり、講義内容や私の履歴・経歴などが文部科学省の承認を貰ったときには、正直面映くうれしく思った。

そんな単純なうれしさに浸っている間もなく、平成14年の9月の開校に向け、準備委員の教授や事務方の方々とどのような内容の講義をしていくのか、どれくらいの時間を使うのか、テキストはどうか、配布資料等はどのように準備するのか等等、細かな決め事の為に時間がとられた。十分な準備期間と思っていた開校までの時間もあっという間に過ぎていった。週1回水曜日の夜6時半から8時と8時10分から9時40分の2コマを11回こなすという、なんとも欲張ったシラバス(講義内容表)をつくってしまった。昨年10月からスター

トの秋期コースは「事業戦略と国際税務」というテーマで、春の2年次を対象としたテーマは「ファイナンスと国際税務」である。実務で自分が経験しているテーマを取り上げ理論展開して行くのだから大丈夫と楽観していたが、講義日間近になると週1回3時間講義することの大変さに、楽観はもろくも消え失せ残るのはプレッシャーだけという状態になった。でも今更後悔なんぞしている暇も無く、自分にとっても実務経験をきちんと理論的に整理するよいチャンスなのでやるしかないと心に決めて何とか時間をやりくりした。

優秀な生徒が本大学院にたくさん応募をしている、皆やる気があり試験でふるいにかけるのが本当に難しかった、というような話を準備委員の教授から聞いた。また実際に彼らの書いた「なぜ本学を選んだのかまた何を学ぼうとしているのか」というレジュメを読むにつけ、実に真剣に勉強しようという生徒の意気込みが伝わってきて、自分も真剣に取り組んでいこうという気合を貰うことが出来た。

平成14年9月25日午後6時からオリエンテーリングを開始した。45分を2回に分けて行ったが総勢で30-40人くらい参加してくれた。皆いずれも真剣で、言葉は交わさなくても生徒の質の高さを感じられた。10月2日が第1回目の講義である。履修者は28名であり、期待していた以上の盛況ぶりである。壇上の席に着き、第一声を発するまでかなり緊張していたように思う。第1回目は「国際

事業展開する上での国際租税法上の論点」というテーマである。ただ単に教えるだけではなく、生徒自らに考えさせ、実務に役に立つ講義をするのが実務家としての客員教授の役目であるから、一方的に情報を与えるだけの講義はしないように心がけた。ただ双方向とはいっても生徒各自の知識・経験レベルがまったく違う中でそのように持っていくのはなかなか難しいことである。ケーススタディーを用いたり、租税判例を原告と被告に分けて争わせたりと、いろいろ工夫して生徒自らが考え参加をするというスタイルを貫いている。最初は長いと思った3時間も何回か経つうちに短く感じるようになってきた。しかし、10月から12月(秋期コース)にかけてと、5月から7月(春季コース:このコースは、本学ご出身の公認会計士渡邊隆司先生にかなりの部分お手伝いいただいている)にかけての毎週水曜日3時間のための準備には相当時間を費やすのも事実である。今年も夏休みが終わるとそろそろ秋期コースの始まりである。今年は去年の蓄積があるから少しは楽かなと思っはいるが、マンネリ化した講義はやりたくないなと思ったりもしている。生徒からの暖かいお礼の言葉や感謝の声が届くときには心底うれしい。その言葉ももらえるよう更なる努力をしてみようと思っている。

追:本大学院のホームページは

<http://www.cgsa.jp/a/teach/index.html>です。ぜひ一度ご覧になってください。

公認会計士第二次試験合格体験記

中央大学商学部会計学科卒

多 奈 部 宏 子

私が、会計士を目指し始めたのは遅く大学2年で簿記一級を取ってからでした。

それまで経理研究所で学習はしていたものの、迷いがありました。会計士試験は難しい試験であ

るため、本当になりたいのか自分自身わかりませんでした。そんな私が真剣に目指し始めたのは、会計学という勉強に面白みを感じていることに気がついたからです。また将来、出産等により一時

職場を離れたとしても、生涯続けていくことができる会計士という資格にも魅力を感じました。しかし、決意が遅かったため圧倒的に勉強量が足りず、合格まで3年間かかりました。

1年目は、会計士を目指すことにしたものの煮えきらず、勉強からなんだかんだと言っては逃げ、短答式試験も周りの誰よりも低い点で不合格でした。あまりのショックから、エンジンがかかり特研入りを果たしましたが、2年目は、短答式合格までこぎつけましたがまだまだ勉強不足で、再び不合格でした。そして今回、3度目の受験で合格することが出来ました。

このように下から這い上がった私だからこそ言える合格の秘訣は、まずは必ず受かるつもりで勉強したこと、次に常に自己研鑽に励んだことだと思います。2度目の試験で、一緒に勉強してきた仲間たちのほとんどが受かり、本当に悔しかったです。そして、合格した彼らと不合格に終わった私との違いは、会計士試験に合格したいという熱意でした。私には、会計士合格への意気込みが足りませんでした。その悔しさから二度と後悔のない受験生活を送ることを念頭におきました。

自己分析をしっかり行い、全科目穴のないよう

丁寧に勉強を進めました。自分なりの目標を設定し、クリアする。更に高い目標を設定し、クリアする。そんな日々でした。また自分に対して厳しくしました。たとえ、順位がよかろうと、その結果に慢心することなく、1科目でも自己の設定する目標を達成できなかったり、取れる問題をミスしていたりすると猛反省しました。誰よりも「会計士合格」というゴールを高く設定していたため、あまり自分を評価することも自信を持つこともありませんでした。もっと実力を上げなければ受からないと追い詰めており、精神的にはとても辛い受験生活でした。しかしこの生活に悔いはありません。厳しい受験生活が着実に成績へと反映されましたし、合格も勝ち取ることが出来ました。

合格した今ようやく自分に自信が持てました。実力もつき、充実した受験生活だったと思います。これからが会計士としての本当のスタートです。この経験を今後の会計士としての仕事に生かしていきたいと思います。

最後になりましたが、経理研究所の諸先生方及びスタッフの方々には本当にお世話になりました。私がここまで来られたのも、先生方のおかげです。ありがとうございました。

受験生活を振り返って

商学部会計学科2年

菅原 祐司

今回公認会計士第二次試験に合格することができ、嬉しい気持ちとともに今まで支えてくれた方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

私が公認会計士という職業があることを知ったのは、中学生の時でした。ただ、その時は公認会計士の仕事の内容は良く知らず、「企業の健康状態を診察する医者」としての役割を果たすものだと思っていました。そしてその頃、何か社会に役立つような職業に就きたいと考え、公認会計士を目指すよ

うになりました。その後商業高校に入学して簿記の勉強を始め、運良く日商簿記検定の1級を高校在学中に取得することができました。

中央大学に入学し、経理研究所の公認会計士講座を「飛び級」として受講し始めてからは、本当に大変な毎日が続きました。まわりは知らない先輩ばかりで、簿記の勉強も十分でないまま、すぐに理論の授業が始まったことから、最初は講義についていくのが精一杯で、成績もあまり良くなかったことから不

安な気持ちになりました。さらに夏休みになると勉強量が次第に増えていき、早朝答練もあることから、片道2時間弱をかけて実家から通うことが大変になり、一人暮らしを始めました。今思うと、この時が勉強に対して本気になれた瞬間かもしれません。この頃にはまわりの先輩たちとも仲良くなり、日曜答練が始まった10月から12月にかけては、受験仲間がいたおかげで何とか乗り切ることができました。その後、私は現役で受験できるチャンスを一回でも増やしたかったので、1月に第一次試験を受験しました。一次試験の科目は国語・数学・外国語(英語)・論文と、私には縁遠い科目ばかりで、経理研究所の仲間にも助けてもらうものの勉強はなかなかはかどらず、試験を受け終わった後の感触は今ひとつ。どうして一次試験に合格できたのか自分でもわからず、合格発表の時はびっくりしてしまいました。

一次試験の結果を諦めていて、二次試験の勉強になかなか手が付かなかったことから、一次試験の合格には焦りました。2年になって、商学部のアカウント・プログラムも活用して、本気で勉強しまし

た。その結果、短答式試験には合格することができました。しかし、短答式試験後はあまりやる気がなくなり、自分を見失ってしまい、経理研究所の講師やスタッフに相談しました。講師やスタッフに励まされて、何とかやる気を復活させてもらい、受験勉強に専念することができました。そして、論文式試験の合格を勝ち取ることができました。

今回私が公認会計士試験第二次試験に合格することができたのは、中央大学と経理研究所という環境があったからこそだと思います。一次試験の時には受験仲間にも助けられ、二次試験は経理研究所の講師・スタッフや受験仲間にも、勉強面と精神面の双方についてとてもお世話になりました。また、裏方から支えてくれた経理研究所の事務の方にもお世話になりました。今まで支えてくれた方々、本当にありがとうございました。まだ私は公認会計士への第一歩を踏み出し始めたばかりですので、これからもご迷惑をお掛けすることもあると思いますが、立派な公認会計士になるように努力しますので、これからもよろしくお願ひします。

平成15年度事業計画 (平成15年4月から平成16年3月まで)

- | | | | |
|-------------------------|---------|---------------|----------|
| 1. 公認会計士第二次試験合格者への記念品贈呈 | | 4. ゴルフ等懇親行事 | 平成15年10月 |
| 2. 中央大学講演会講師派遣 | 経理研究所主催 | 5. 会報の発行 | 平成15年12月 |
| | 商学部主催 | 6. 会員名簿の改訂版発行 | 平成15年12月 |
| 3. 総会及び懇親会 | 平成15年6月 | 7. 研修会及び新年会 | 平成16年1月 |

なお、平成15年4月より平成17年3月までの役員は以下のとおりです。

会員の皆様のご支援、ご協力を切にお願い申し上げます。

会 長	金井一夫	
幹 事 長	後藤徳彌	
副幹事長	遠藤忠宏	柏寄周弘 (会計担当)
	河合明弘	岸田 靖 (会報担当)
	熊坂博幸	瀧澤 晋 (名簿担当)
	瀧崎章夫	都甲和幸
	中村嘉伸	三宅博人
	吉井敏昭	
会計幹事	荻野八郎	高瀬正行
	古川行正	

平成14年度収支決算及び平成15年度収支予算

(単位：円)

I. 収入の部	平成14年度決算額	平成15年度予算額
1. 会費収入	1,325,300	1,500,000
2. 総会懇親会収入	309,100	400,000
3. 講演会等行事収入	246,000	300,000
4. 同好会収入	0	0
5. 受取利息	1,313	2,000
収入合計	1,881,713	2,202,000
II. 支出の部		
1. 総会関係支出	669,869	700,000
2. 講演会等行事支出	646,155	700,000
3. 会報関係支出	162,915	200,000
4. 学生奨学関係支出	0	600,000
5. 対外関係支出	35,345	50,000
6. 事務費用	945	10,000
7. 雑支出	1,225	10,000
支出合計	1,516,454	2,270,000
当期収支差額	365,259	△68,000
前期繰越金	1,402,970	1,768,229
次期繰越金	1,768,229	1,700,229

会費振込のご協力ありがとうございました。本年度もよろしくお願ひします。

以上

平成15年公認会計士第二次試験 出身大学別合格者数

1位	(1)	慶應義塾大学	228名	7	(9)	同志社大学	48名
2	(2)	早稲田大学	152	8	(7)	神戸大学	47
3	(4)	東京大学	78	9	(6)	明治大学	45
4	(3)	中央大学	76	10	(一)	大阪大学	37
5	(5)	一橋大学	71	() は前年順位			
6	(8)	京都大学	49	日本公認会計士協会の調査による。			

平成15年公認会計士第二次試験合格者 (76名)

氏名	学部・学科	在・卒	氏名	学部・学科	在・卒
菅原 祐司	商・会計	2年在学	三浦 亮司	商・経営	4年在学
飯塚 敦男	商・会計	3年在学	石川 育子	商・会計	03. 3卒
石井 徹	商・会計	3年在学	大高 政宏	商・会計	03. 3卒
市川 典史	商・会計	3年在学	小野 裕有	商・会計	03. 3卒
香取 隆道	商・会計	3年在学	加藤 翼	商・会計	03. 3卒
関口智香子	法・法律	3年在学	木村 哲也	経・産経	03. 3卒
上橋 徳久	商・会計	3年在学	倉石 寛子	商・会計	03. 3卒
舟山 真登	商・会計	3年在学	佐藤 豊	商・会計	03. 3卒
増田 吉彦	商・会計	3年在学	鈴木 康寛	経・産経	03. 3卒
松岡 剛弘	商・会計	3年在学	篠原 敬海	商・会計	03. 3卒
見上 洋介	商・会計	3年在学	多奈部宏子	商・会計	03. 3卒
村上 史哲	商・会計	3年在学	福島 幸恵	商・会計	03. 3卒
森田 一樹	商・会計	3年在学	福田 秀幸	商・会計	03. 3卒
渡邊 太郎	商・金融	3年在学	三浦 志津	商・会計	03. 3卒
新井 成道	商・商貿	4年在学	三浦 奈緒	商・経営	03. 3卒
大村 祐太	経・経済	4年在学	森永 晃仁	商・会計	03. 3卒
小野華菜子	法・法律	4年在学	近藤 路子	商・会計	02. 3卒
鳥尻 将史	商・会計	4年在学	佐藤 圭吾	商・会計	02. 3卒
高橋 耕治	商・会計	4年在学	鷲見 洋一	商・会計	02. 3卒

氏名	学部・学科	在・卒
別府 優法	商・会計	02. 3卒
和田 友子	商・会計	02. 3卒
青木 拓哉	商・会計	01. 3卒
貝藤 孝平	商・会計	01. 3卒
上村 治	法・法律	01. 3卒
川久保孝之	法・国企	01. 3卒
川野慎一郎	商・会計	01. 3卒
齊藤 寛幸	経・経済	01. 3卒
谷 貴政	商・会計	01. 3卒
橋本 昌味	商・金融	01. 3卒
平岡 健	経・経済	01. 3卒
薬師寺真志	経・国経	01. 3卒
柳澤 俊輔	商・会計	01. 3卒
吉田 千春	商・会計	01. 3卒
渡邊 裕介	経・経済	01. 3卒
栗山 信二	商・会計	00. 3卒
玉虫 賢一	経・国経	00. 3卒
中崎 賢志	商・会計	00. 3卒
藤田真理子	経・産経	00. 3卒

氏名	学部・学科	在・卒
浅川 朋子	商・会計	99. 3卒
木村 智宏	経・経済	99. 3卒
中村 岳広	商・会計	99. 3卒
野中 圭子	総政・政策	99. 3卒
疋田 通丈	経・産経	99. 3卒
三吉 孝治	商・会計	99. 3卒
若山巖太郎	商・会計	99. 3卒
井出 嘉樹	商・金融	98. 3卒
杉山 龍一	商・商貿	98. 3卒
鈴木 修司	商・会計	98. 3卒
大島 正剛	商・会計	97. 3卒
長 英一郎	商・会計	97. 3卒
古屋満喜男	法・法律	97. 3卒
山崎 哲司	経・国経	97. 3卒
奥津 毅	経・産経	96. 3卒
白石 武士	経・産経	96. 3卒
林 誉治	商・商貿	92. 3卒
荒牧瑠理子	法・法律	90. 3卒
森本 泰宜	法・政治	89. 3卒

編集後記

岸 田 靖

中央大学公認会計士会報「絆」の第10号をお送りいたします。お忙しい中ご寄稿頂きました先生方に厚くお礼申し上げます。

今回は巻頭に、中央大学経理研究所所長に就任された木島先生に「経理研究所：3本の柱」というタイトルで寄稿して頂きました。現場の声として記載されているくだりなど、改めて会計の世界での経理研究所の果たして来た役割を認識した次第です。OBの一人として益々の経理研究所の発展を願うところです。

また、今回は金井会長、後藤幹事長の新執行部による初めての会報のため、会長挨拶を記載致しました。昭和30年代の会計士試験の受験生活の様子が垣間見れるくだりなどもあり、昔懐しく思い出される方、時代の違いを感じられる方などそれぞれの世代で興味深くお読み頂けるのではないかと思います。

いわゆる会計ビックバンは制度的には落ち着きつつあるものの、会計を取り巻く環境変化は目まぐるしい状

況が続いております。そのような中で、今年の「第24回日本公認会計士協会研究大会「高松大会」報告」を鍋嶋先生にお願いし最新の研究大会での議題や状況を寄稿頂きました。また、中央大学の取り組みとして昨年開講致しました中央大学国際会計専門大学院で客員教授として教鞭を取っておられる川村先生に「中央大学国際会計専門大学院客員教授就任の前後」という題目で、大学院創設の熱気に満ちた状況を寄稿頂きましたので是非御一読下さい。

平成15年度公認会計士第二次試験は残念ながら出身大学別では第4位という結果に終わりましたが、合格者の中から田奈部さんと菅原さんに合格体験記を寄稿頂きました。特に菅原さんは大学2年生合格という快挙であります。フレッシュな声を是非御一読下さい。

来年も会員の皆様が今年同様一層ご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。

中央大学公認会計士会報 No.10

平成15年12月1日発行

発行人 中央大学公認会計士会会長

金 井 一 夫

発行所 〒162-8473 新宿区市谷本村町42-8

中央大学経理研究所気付